

国立国語研究所学術情報リポジトリ

The difference between the interjections anô and sonô which appear in discourse

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-03-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 堤, 良一, TSUTSUMI, Ryoichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002193

談話中に現れる間投詞アノ（一）・ソノ（一）の 使い分けについて

堤 良一

(岡山大学)

キーワード

間投詞, 心的操作標識, アノ（一）／ソノ（一）, OPI

要 旨

本稿では、間投詞アノ（一）・ソノ（一）について談話管理理論の観点からの考察を行った。両者は言語編集に関わる心的操作標識であるが、アノが話者が言いたいコト・モノ（P）から表現形式（L）を編集集中であることを表す標識であるのに対して、ソノは（L）から別の表現形式（L'）を複数作成中であることを表す標識である。このような作業は、抽象的な話題を扱う際に典型的に現れることを調査によって示した。抽象的な話題では、話者は誤解を避けたり、より洗練された語を用いたりしようとするためにこのような作業が必要であると考えられる。このように考えることで、ソノ（一）が持つ発話効果も説明することができる。また、アノ・ソノが指示詞由来の間投詞であることから、アノ（一）での編集作業が田窪・金水（1996）のD-領域、ソノ（一）での編集作業がI-領域で行われると考えると、これらが指示詞の理論の中で分析可能であることを示唆した。

1. はじめに一問題の所在

本稿では、間投詞アノ（一）・ソノ（一）（以下、単にアノ、ソノと記す）について考察する。間投詞アノ・ソノとは、以下の例に現れるような、談話中の要素のことである。

- (1)「あ、その場合だと割合ははっきりしてて、アノ一維持はしてないってことになりますよね。ですから、まソノ一、度合いとか全体的に判断しないとダメですけど、なんか、あるテーマに…例えばそう、ですね、アノ一家の周りってどんなおうちなんですか中国のソノ家の今日のセキホウ…セキホウだったね?…」 (K氏)
- (2)「…それに対して韓国政府がどういう風に対応していったらいいのか正直ソノ困っている、という言い方をしていました。でアノその後、ソノ韓国政府がまアノ…DNA鑑定を独自に行うということを発表しましたけれども、これはついに韓国政府が動き始めたという楽観的な見方なのではなくて韓国側としてはソノ…まあ6カ国協議を再開して、ま今回の件で膠着してしまっは困ると…」

(2006.4.15 放送分のブロードキャスター、竹内由布子氏の発言から引用)

このような要素は従来フィラー (filler) と呼ばれ、場つなぎ的な性格を有するとされることがあ

る。実際、(1)(2)からこれらの要素を取り除いても談話は成立するし、また書きことばにおいては、そもそも場をつなぐ必要がないために、これらの要素は現れない。

一方、近年アノ・ソノを含む間投詞・応答詞（それらを合わせて感動詞と言うことがある（田窪 2005 参照））を、談話管理理論的立場から心的操作標識として捉え、それらが談話の中で果たす役割を明らかにしようとする立場が存在する（定延・田窪 1995; 田窪・金水 1997; 定延 2005; 大工原 2005; 堤 2004, 2006 等）。アノについては定延・田窪（1995）がエエトとの対比を行い、エエトが「演算領域の確保」を行っていることを表す標識であるのに対し、アノは「言語編集」という操作を行っていることを表す標識であるとしたが、ソノに関する本格的な研究は大工原（2005）、堤（2004）を除けば、管見にしてない。

本稿は、先行研究に従い、アノ・ソノを心的操作標識として捉え両者の相違を検証し、各々が発せられる際の心的操作がどのようなものであるかを明らかにすることを目的とする。本稿は以下のように構成される。まず次節で先行研究の概観を行う。次に第3節では、発話する表現形式そのものに話者が慎重になるような場合には、そうでない場合に比してソノが多用される傾向にあることを調査によって明らかにする。時事問題などのより抽象的な話題を扱う場合には、聞き手の誤解を招かないように適切に表現を選択したり、より洗練された語彙を用いたりするが、そのような言語編集を行う場合にソノが多く発話される。その結果、アノに対するソノの使用頻度が、抽象的でない話題を扱う時よりも高くなることを明らかにする。その結果に基づき第4節で両者の差異を考察する。第5節では、ソノの発話効果について考える。第6節は、まとめと今後の課題であるが、特に、指示詞の理論との関連について論じる。

2. 先行研究

2.1. 定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）

間投詞に関する理論的な研究は、近年盛んになりつつあるが、中でも定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）が、本稿との関連では重要である（その他の先行研究に関しては山根 2002:15-30 に詳しい解説があるので参照されたい）。

定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）は、談話管理理論の枠組みを用い、言語表現を心的操作の明示という観点から考察する（定延・田窪 1995:75）。このような立場においては、間投詞は「心的操作標識」である（ibid.p.76）。つまり、間投詞は「外部からの言語的・非言語的入力があったときの話し手の内部の情報処理状態の現れ」である（田窪・金水 1997:261）（定延・田窪 1995 では本稿での間投詞は「感動詞」、田窪・金水 1997 では「応答詞・感動詞」として扱われている。以下、本稿では「間投詞」に統一する）。田窪・金水（1997）では、このような観点から間投詞を概観しているが、アノ・ソノは「言い淀み系」のうちの「形式検索」に関わるものに分類されているものの、その差異についての詳しい記述はない。

次に、定延・田窪（1995:78-79）の主張を簡単にまとめれば、エエト・アノ（一）は、話者が以下のような心的操作を行っていることを表す標識であるとされる（(3), (4)）。

(3) エエトの基本的用法

談話中に、結構手間のかかる心的操作（たとえば検索や計算）の必要が生じた際に演算領域を確保するための予備的な心的操作に入っている、あるいは入りつつ当該の検索や計算を行っていることを表す。

(4) アノ（一）の基本的用法

言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作を行っていることを表す。

(5) [授業中、教科書を読めと教師に言われた学生が]

a. ええと、リュウゲンヒゴ、も飛び交った。

b. ??あの（一）、リュウゲンヒゴ、も飛び交った。

(6) 一郎：1234 足す 2345 は？

次郎：a. ええと、3579。

b. ??あの（一）、3579。

（(5) (6)は、定延・田窪 1995:82-83 より引用）

定延・田窪（1995:82-83）によると、(5)においてエエトが自然であるのは、四字熟語「流言飛語」の文字列に対応する音韻情報が即座に検索できず、いったん外界とのインターフェイスを遮断して心的辞書までこの情報を探しに行く（つまり、演算領域を確保する）という想定が自然だからである。他方、アノが不自然であるのは、話者がリュウゲンヒゴという読みを概念から検索するという想定が通常不自然であるからである。また、(6)においてエエトが自然であるのは、計算において演算領域を確保するために、次郎が頭の中を整理するという想定が自然だからであり、アノが不自然なのは、計算の答えはすぐに分かったが、それをどのような音声形式にのせて発話するかという処理に時間がかかっているという想定が通常不自然であるからである。

定延・田窪（1995）はこの他にもエエト・アノの違いについて様々なデータを挙げて検証しているが、その観察、指摘はどれも卓見で、特にエエトについての記述は妥当である。アノに関しても、(4)の記述は概ね妥当なものであると考えるが、ソノとの相違を考えるならば、その違いを明確に説明するような、さらに精密な記述に書き換える必要があるだろう。

2.2. アノ・ソノに関する先行研究

アノ・ソノの違いを中心的に扱ったものとしては堤（2004）、大工原（2005）がある。堤（2004）は、アノとソノが使用される場合ではニュアンスに差があることを指摘し、ソノは言い訳めいたニュアンスを伝えることと、話題の複雑さがアノ・ソノの使用頻度に影響を与えることを指摘した。大工原（2005）は、主に談話の冒頭部に現れるアノ・ソノの違いについて、ア系列指示詞・ソ系列指示詞との連続性から説明を試みている。大工原（2005）は言語的文脈の有無がソノの使用の自然さに影響するとし（p.71）、(7)でソノが使用できないのは、言語的な先行文脈が存在しないという、文脈指示用法におけるソ系列指示詞の機能を受け継いでいるからだという。

(7)（一郎は初めて訪れた町で偶然通りかかった見知らぬ男性に声をかけた）

一郎：（あの一／＃その一）、すみません。

男性：はい。

一郎：ちょっと道をお尋ねしたいんですが…。（大工原 2005:70 より引用、判断は筆者）

(8) 言語的文脈の有無は、間投詞「その(一)」の使用の自然さに影響する。

(大工原 2005 : 71 から引用)

一方、(9) で両方が使用できるのは、太郎がトイレに立つまでにハリー・ポッターという小説について話していたという言語的文脈があるからであるという。

(9) (喫茶店で、太郎と花子が会話をしている。2人はハリー・ポッターという小説について話をしていた。途中で、太郎がトイレに行ったため、1分間ほど話が途切れた。太郎が席に戻ってきた時、花子が太郎に話しかけた)

花子：(あのー/そのー)、さっきの話の続きなんだけどさ、ハリーって、何歳のときに魔法の学校に入学したんだっけ？

太郎：あ、たしかね…。 (大工原 2005 : 71 より引用)

確かに、(7) (9) の説明に大工原は成功している。しかしながら、彼の説明にはいくつかの疑問点も存在する。以下、順に見てみよう。

まず、大工原は「言語的文脈」とは田窪・金水(1996)のI-領域のことであるとする。I-領域とは「対話のための一時的な情報格納領域で、対話の際に言語的に得られた属性しかアクセスできない¹⁾」(田窪・金水 1996 : 65)。金水(1999 : 72)の記述も参考になる。

(10) 「言語的文脈は、話し手にとっての外的世界とは独立に、それだけで状況を形成することができる。この状況は、語彙の概念的意味、フレーム的意味と最小限の推論等によって形成される。この言語的文脈がつくる状況を、田窪・金水(1996)その他に従ってI-領域と呼んでおこう。」 (金水 1999 : 72 から引用)

要するに、大工原の説は、発話に先立つ何らかの先行情報の有無がソノの使用の自然さに影響すると考えているということだと理解できる。

もし、大工原の説が正しいとすると、言語的文脈が全くゼロであるのは、談話の冒頭部のみであることになる。つまり、(1) (2) のような、談話の途中に出てくるアノ・ソノは潜在的にどちらも認可されると予測される。この予測自体は正しい。実際、(1) (2) において、アノをソノに、ソノをアノに入れ替えても、不自然な発話にはならない。しかしながら大工原(2005)は、国立国語研究所(2004)「日本語話し言葉コーパス」の中の2つのタイプの異なる談話を用いて、言語的文脈が豊富にある談話では、言語的文脈が全くない談話に比して、ソノが多く使用されるという結果を報告している²⁾。大工原の主張をそのまま解釈すれば、談話の冒頭部でのみソノが使用しにくくなり、2つの談話ではアノ・ソノの使用率の差はないはずであるが、実際はそうではない。大工原が異なる談話のタイプに着目したことは卓見であるが、以上のことを考えると、別のアプローチを追求する必要があるだろう。

さらに、(8) の主張には経験的な問題もある。

(11) a. 田中さん、実は…ソノ…折り入って相談したいことがあるんですけど…。

b. 美子さん、アノ…ソノ…僕はあなたが好きなんです！

(11) において、確かに全くの冒頭部でのソノは不自然ではあるが、「田中さん/美子さん」を呼び止めておいて、その段階で—言語的文脈が全くない状態で—ソノを使用することは問題な

い。このデータは、間投詞のソノの使用には言語的文脈は必ずしも必要ではなく、彼の主張の反例となるだろう。大工原（2005）は間投詞アノ・ソノの用法を、発話される情報がD-領域/I-領域のどちらの心的領域に属するかによって使い分けられると論じており、この点は筆者も賛意を表す。しかしながら、指示詞と間投詞の機能について、明確に区別することなく論じた点には問題があると思われる（第6節でこの問題に少しふれる）。本稿では、間投詞アノ・ソノは定延・田窪（1995）、田窪・金水（1997）にしたがって、言語編集集中であることを示す心的操作標識であるとする方向で考察をすすめる。

3. 話題とアノ・ソノ

本稿では、大工原（2005）の（8）への代替案として、まず次のような仮説を立て検証する。

（12）何らかの状況により、話者が語彙や表現形式をより洗練されたものにしたり、誤解を招かないようなものにしたり等、より慎重な言語編集作業を行う必要に迫られた時、ソノが使用される。

定延・田窪（1995:79）では、アノは「名前の検索と、適切な表現の検討」という言語編集を行うとされている。本稿での「語彙や表現形式」とは、彼らの「名前、適切な表現」のことであると考えて差し支えない。アノもソノも、語彙や表現形式を編集する際に現れる標識であると考えられるが、直感的な言い方をすれば、より注意深い編集作業が行われなければならないような状況下ではソノが用いられると考えるのである。したがって、談話のタイプやそれが発せられる状況が異なれば、ソノの出現比率が異なってくることは自然に予想され、前節で指摘した大工原（2005）が抱える問題は回避される。

さて、（12）のように、より慎重な言語編集が課せられる状況として、本稿では時事問題などの抽象的な話題における発話場面を考察対象とする。時事問題を扱うような状況においては、配慮に欠ける表現を用いたことによる失言や誤解が、政治的な問題に発展したり、差別的な発言と捉えられるような事態を招かないとも限らない。また、専門的な話題を扱う場合には、普段は使用しないような語彙や表現を用いて、談話の質を洗練されたものにしなければならないだろう。このような状況においては話者は普段に比して語彙・表現を慎重に選択する必要に迫られると考えられ、もし（12）が正しいのであれば、ソノの使用率が上昇することが予測される。

このことを3.2節ではOPIというインタビューの発話を、3.3節では、テレビ番組の発話を分析することで実証したい。ではなぜ、話者が慎重な言語編集を行えばソノが増えるのかについては、第4節以降で考えることにする。これらの仕事の前に3.1節で、本稿の分析において間投詞と規定される（アノ・）ソノについて考えておきたい。なぜなら、自然談話の中に現れるソノには、指示詞のソノであるのか、間投詞のソノであるのか区別が難しいものも多く見られるからである。

3.1. 間投詞と指示詞

本節では、特にソノについて、指示詞と間投詞との本稿での区別について述べておく。生の談

話においては、特にソノについて、文脈指示の指示詞のソノであるのか、間投詞のソノであるのかの区別がつきにくい場合がしばしばある。そのような場合とは、i) 名詞句の直前で発せられ、ii) かつ、当該名詞句に対する先行詞（および先行文脈）が存在するような場合である。なお、ソノについては指示詞であるか間投詞であるか、さほど迷うデータはないのでここでは議論しない。

(13) (14) に、便宜的に番号を付したソノを見てみよう。ソノ^①とソノ^③については、文字化した部分の前も含めて、先行詞らしいものがないので間投詞ソノと判断して問題なかろう。問題はソノ^②とソノ^④である。ソノ^②においては波線で示した先行詞「なんとか疲労症候群」が繰り返され、その直前にソノ^②が発せられている。つまり、「今話題になっているところの、なんとか疲労症候群」というニュアンスも感じられ、そうであるならば指示詞である可能性もあるのである。ソノ^④についても同様の分析が可能で、「今話題になっているところの店」という解釈があり得る。ただ、ソノ^④についてはソノ^④のあとにもう一度ソノが繰り返されており、ソノ^④が指示詞だとすれば、指示詞を言い直す形で繰り返したと分析できるし、ソノ^④が間投詞であれば、間投詞のソノ+指示詞のソノと発せられたと考えることになる。

(13) M: …微熱があって、しんどくて、いっくらでも、とろとろとろとろ眠たくて、

T: 結局あれですよ…なんやアノ…

M: アノなんとか疲労症候群じゃないかとかって…

T: そういうなんかソノ^①病名がついてしまえばもうそれで診断書が書けるんですよ。

M: いやそれで、ちょうどね、その時にね、新聞にソノ^②なんとか疲労症候群、昔はそんなこと言ってなかったけど、最近少し話題になり始めてて、それが出てて、その症状とそっくりだから、切り抜いて…。

(14) M: …いやだから、最初フランス料理のお店かなあと思いながら（そうそうそう）、友達
の車で連れて行ってもらったら、中華料理だったから、えー何でなん…フランス語の名
前なんだろうと…

T: 3500円くらいで、べたーなチンジャオロースとかチリソースとか酢豚とかが出てき
て、3500円はないやろーと思いつつ…

M: 全然覚えてないもう何年も前から…何年も行ってないと思う。

T: いやソノ^③、ANAのマイレージがたまるっていう…

M: どこが？

T: いやソノ^④その店が

M: あそう？

(以上、T氏、M氏)

本稿では、ソノ^①～ソノ^⑤は全て間投詞であるとする。その根拠は、これらの全てが、他の発話に対して非常に弱く発話されているという点にある。例えばソノ^②の直前に「その時」という、明らかに指示詞として発話されたソノが存在するが、このソノは、「時」と同じ強さ、長さをもって発音されている。ところがソノ^②においては「新聞に」と「なんとか」の間に挟まれるようにして、非常に弱く、かつ短く発音されている。同様に、ソノ^④についても、直後のソノは「店」と同程度に強く発音されるのに対して、ソノ^④は弱く短く発音されている。そこで、本稿

で挙げるデータにおいては、このようなソノは間投詞であると捉え、分析を行った。ソノ^①～ソノ^④のように、間投詞ソノには指示詞に近いと考えられるものから、そうではないものまであるようである。これについては本稿ではこれ以上立ち入らず、今後の課題としておく。

3.2. OPIのテストのアノ・ソノ

(12)の仮説が正しいことを確かめるために、日本語教育において非母語話者の口頭能力を測るインタビューテストとして用いられるOPI(Oral Proficiency Interview)のテストの発話を使用する。先述したような理由により、話題が抽象的になれば、話者はより慎重に語彙・表現を選択すると考えられ、ソノの出現が増えると予想される。

OPIとは、ACTFL(the American Council on the Teaching of Foreign Languages:アメリカ外国語教育協会)によって作成された口頭能力試験であり、資格を持ったテストが被験者である非母語話者の口頭能力を測定するものである。試験は1対1の会話形式で30分間行われ、判定は初級-超級まででなされ、超級を除いたそれぞれの級には下位レベルが設定される(e.g.初-中, 上-中など)。

OPIでは、テストが被験者のレベルを測定するために様々な質問を行うが、初級や中級レベルでは身の回りの一般的なことが話せる能力を試す質問をするのに対し、上級や超級の被験者に対しては、政治、教育、経済問題などの、抽象度の高い質問を行い、議論をするような能力を測る(詳しくは牧野他2001を参照されたい)。調査に用いたデータの中から、中級と判定されたデータ(15)と、超級と判定されたデータ(16)におけるテストの発話を見てみよう(なお、OPIでは非母語話者がテストである可能性もあるが、本稿で用いた調査におけるテストは全て日本語母語話者である)。(15)では、テストは被験者の身近な話題-家族構成、出身地、得意な料理など-についての質問をしているのに対し、(16)ではテストは被験者の身の回りのことを離れたより抽象的で一般的な話題-坪田譲治の作品、食の健康、など-について質問をしている。

(15)a. Ik: じゃ、××さんは(兄弟の中で)男の人一人だけですか?あ、そうですか。かぞ、アノ、兄弟はたくさんいると楽しいですか?

b. In1: ××さんはアノ、どちらからいらっしゃいましたか?

c. In2: どんな料理ですか?ちょっとアノ教えてください。わたし、見たことも聞いたこともないので…

(16)a. In3: 坪田譲治が書く、ソノ、童話の、なんかテーマのようなものはどんなもの、なんですか?…(中略)…それは、どういうきっかけで…ソノ日本の、坪田譲治という作家に着目されたんですか?

b. T1: 農薬っていうのはソノ、やっぱり人体に影響がある…んですかね?

c. T2: そうすると、ソノ、マ、消費者の不安ということを考えますと、なんか鳥インフルエンザにしてもBSEにしてもちょっとコウ…過敏にですねえ、しすぎだと思いませんか?

「抽象度が高い」という点について「ACTFL 言語運用能力基準－話技能」では、超級話者は「具体的・抽象的双方の観点から」会話に参加でき、しかも、「正確さを保ちながら、関心のある事柄や特別な専門的分野について議論したり、複雑なことを詳細に説明したり、筋の通った長い叙述をしたりする。」(牧野他 2001:223)としている。どのような話題が抽象的で、どのようなものがそうでないかということは、相対的な問題であり、絶対的に決定することはなかなか難しいであろう。ある話題は、ある話者にとっては抽象度が高いかもしれないし、同じ話題が別の話者にとってはそれほど抽象的でないという場合もあり得よう。本稿でも、「抽象度」という語についてはそのような捉え方をしているが、時事問題や社会問題は、一般的に自分の身の回りの話題よりも抽象度が高いと考えて議論を進める。

さて、以上のように OPI においては、被験者のレベルに応じてテストが扱う話題の抽象度が変わるので、話題の抽象度に応じて間投詞アノ・ソノの出現がどのように変化するかを調べるには都合がよい。抽象的な話題を扱う場合には、普段使用しないような複雑な語彙を使用したり、かなり長い複段落を使用したりしながら、議論を展開していくことになる。(12) のような状況である。このような状況ではソノの使用が増えていくのだとすれば、OPI のテストの発話においては、初級や中級のインタビューを行っている時よりも、上級や超級のインタビューを行っている時の方がソノの使用が増えるのではないかと予測される。この予測は、表 1 によって正しいことが分かる。なお、今回の調査に用いたインタビューの条件、各テストの情報は以下のとおりである。

- (17)a. インタビューは初級から超級までそれぞれ 1 回 30 分である。表中 (2) とあるものは、そのレベルのインタビューを 2 回分調査したことを示す。
- b. テスターは全て母語話者である。
- c. 比較の妥当性を保証するために、各テストが行った両タイプのインタビューを使用した。
- d. テスターの性別や年齢層は以下のとおりである³。
- Ik: 女性, 30 代
 T: 男性, 30 代
 W: 女性, 30 代
 In: 女性, 50 代

表 1 OPI におけるアノとソノの出現頻度 (アノ:ソノ)

初・中級の場合の出現頻度

	Ik(2)	T(2)	W(1)	In(1)	計
アノ	5	3	3	29	40
ソノ	0	0	0	1	1
出現率	100:0	100:0	100:0	97:3	98:2

上・超級の場合の出現頻度

	Ik(2)	T(2)	W(1)	In(1)	計
アノ	2	17	14	29	62
ソノ	5	31	13	6	55
出現率	29:71	35:65	52:48	83:17	53:47

例えば、Ik氏は初・中級の二回のインタビューにおいてアノを5回発し、ソノは一度も発しなかったが、上級や超級のインタビューになるとアノを2回発したのに対し、ソノを5回発し、初・中級のインタビューとは異なる傾向を示している。T氏やW氏は、話が複雑になる上・超級のインタビューにおいてはアノの使用も増えるが、それと同時にソノの使用も増え、T氏ではソノがアノのおよそ倍、W氏ではアノとほぼ同数のソノが使用される。In氏は特に興味深い。インタビュー時間はともに約30分であり、その間にIn氏が使用したアノの数は29と同数である。つまり、In氏は29回のアノを使用する間に、初・中級ではソノを1回しか用いなかったが、上・超級では6回のソノを使用したことになる。

OPIに関しては、この他に「KYコーパス version1.2」があり、これについても調査を行った。ただし、KYコーパスは音声資料がなく、文字化資料のみでフィラーかどうかを判断するために、正確さに関して問題がないわけではない。またテストの詳しい情報も分からない。調査データに関する情報を(18)に、調査結果を表2に、それぞれ示す。

(18) KYコーパス中で調査したデータ

初・中級…CIL01, CIL02, CIL03, CNH01, CNH02, KIL01, KIL02, KNH01, KNH02, KIH01, EIL01, EIL02, EIL04, EIL05, ENH01

上・超級…CS01, CS02, CS03, CS04, CS05, KS01, KS03, KS06, KS07, KS09, ES01, ES02, ES05, ES06, ES07

※C, K, Eはそれぞれ、中国語、韓国語、英語母語話者が被験者であることを、Sは超級、Iは中級、Nは初級、H/M/Lは、サブレベル上/中/下を表す。例えばNHは初-上、ILは中-下である。

※データの抽出法は、上・超級においては各母語から超級のデータを5本ずつ選んだ。初・中級に関しては、中-下を中心に各母語から5本ずつ選び、データが足りなければ初-上、中-中を入れた。

※調査対象のデータは、全て母語話者であるテストの発話である。

表2 KY コーパスにおけるアノとソノの出現頻度（アノ：ソノ）

初・中級の場合の出現頻度

	CIL01	CIL02	CIL03	CNH01	CNH02	KIL01	KIL02	KNH01	KNH02	KIH01	EIL01	EIL02	EIL04	EIL05	ENH01	計
アノ	50	16	33	33	3	6	24	19	54	31	43	2	32	20	6	372
ソノ	3	0	1	0	0	0	1	0	2	2	2	0	0	1	1	13
出現率	94:6	100:0	97:3	100:0	100:0	100:0	96:4	100:0	96:4	94:6	96:4	100:0	100:0	95:5	86:14	97:3

上・超級の場合の出現頻度

	CS01	CS02	CS03	CS04	CS05	KS01	KS03	KS06	KS07	KS09	ES01	ES02	ES05	ES06	ES07	計
アノ	31	66	57	41	140	44	35	38	45	45	43	36	40	40	83	784
ソノ	2	4	6	7	8	5	0	11	3	5	5	4	21	6	21	108
出現率	94:6	94:6	91:9	85:15	95:5	90:10	100:0	78:22	94:6	90:10	90:10	90:10	66:34	87:13	80:20	88:12

上述したように、KY コーパスではどのテストが同一人物であるか、特定することができないために、表1で行ったような、同一テストの発話を初級から超級へのインタビューというように、縦断的に見ることはできない。しかしながら、被験者が中国語、韓国語、英語母語話者それぞれ5名ずつ、計15名ずつのOPI中のテストのアノ・ソノを合計してみると、初・中級では、ソノの出現率はアノに対して3%であるのに対して、上・超級のそれは12%となり、4倍にはね上がる。

以上の調査から、以下のようなことを言うことができよう。

- (19) 被験者のレベルが初・中級の場合と、上・超級の場合とを比較すると、テストの発話におけるソノの使用率は後者の方が前者よりも高い。

本小節では、まずOPIにおけるテストの発話を初級のインタビューから超級のインタビューというように、縦断的に観察することで、同一話者のアノ・ソノの使用率の変化を観察した。さらに、データ量を補強するために、KY コーパスを用いて、テストの発話中に現れるアノ・ソノも調査した。二つの調査はともに(19)の結果を示した。この観察が正しいものであるとすると、被験者のレベルが上がり、それに応じて複雑で抽象的な話題を扱わなければならないときに、テストはより慎重に言語編集を行い、そのことでソノの使用率が上がると考えられるのである。これは先の(12)の仮説が正しいことを示唆する。

次小節では、全く別のタイプの話題を扱うテレビ番組を二つ挙げ、そこでのゲストのアノ・ソノの使用実態を見てみることにする。そこでも、複雑な時事問題を扱う番組におけるゲストの発話に、ソノが多用される傾向があることが観察される。

3.3. テレビ番組のアノ・ソノ

時事問題を扱うような番組と、日常の出来事をリラックスして話す番組とでは、前者の方がより抽象的な話題を扱う。抽象的な話題を扱う際には、話者はより慎重に言語編集作業を行うと考

えられるので、もし (12) が正しければ前者の番組の方が後者に比べてソノの使用比率が高くなることが予測される。本節では前者として TBS 系列で毎週土曜日午後 10:00～11:30 に放送される「ブロードキャスター (以下、BC)」を、後者として月～金曜日の午前 8:30～10:00 に放送される「はなまるマーケット」中の「はなまるカフェ (以下、HC)」における出演者のアノ・ソノを調べた。BC では、事件などの映像が流れた後、週替わりで登場するゲストがコメントを行う。HC は、日替わりのゲストと司会者の対談形式である。なお、ともに生放送であり、BC ではニュース原稿を読むような部分は調査対象から除外した。話題は (20) のようである。

(20) a. BC: 秋葉原の若者たち, 拉致被害者問題, (国会議員の) メール問題, トリノオリンピック, など。

b. HC: 子育てについて, 次回出演作品について, 最近の趣味について, など。

調査方法は以下のものである。まず両番組から任意のゲスト, コメンテーターを 10 名抽出する。そして, それぞれの話者が発話した時間を計測し, その時間内における間投詞アノ・ソノの出現回数を数え上げた。

3.2 節と同様に, もし話題が複雑で抽象的になるとソノの使用率がアノに比して高くなるのであれば, HC よりも BC の方が, 扱うテーマが抽象的であることで, ソノの出現率が上がることが予測されるが, この予測は表 3, 表 4 により裏付けられる。

表 3 ブロードキャスターの出演者のアノとソノの出現頻度 (アノ:ソノ)

	F 氏	N 氏	M 氏	T 氏	S 氏	TO 氏	K 氏	KB 氏	AM 氏	HO 氏	計
アノ	22	13	8	26	25	52	35	19	6	25	231
ソノ	22	8	9	30	4	2	1	11	0	3	90
時間	13'50"	2'42"	4'06"	9'12"	10'34"	5'05"	10'35"	2'36"	4'20"	2'46"	65'46"
出現率	50:50	62:38	47:53	46:54	86:14	96:4	97:3	63:37	100:0	89:11	72:28

表 4 はなまるマーケットの出演者のアノとソノの出現頻度 (アノ:ソノ)

	I 氏	TJ 氏	MM 氏	KR 氏	SM 氏	MD 氏	YM 氏	KK 氏	KT 氏	IT 氏	計
アノ	27	34	26	39	13	42	21	42	47	11	302
ソノ	1	3	1	1	3	2	1	1	8	1	22
時間	14'22"	6'30"	6'14"	13'21"	10'39"	12'22"	5'36"	7'32"	22'14"	9'56"	108'46"
出現率	96:4	92:8	96:4	98:2	81:19	95:5	95:5	98:2	85:15	92:8	93:7

BC の中には表 3 中の TO 氏, K 氏, AM 氏のようにソノをほとんど使用せずに発話する話者がいる一方で, F 氏, N 氏, KB 氏のようにアノとソノの比率が 6:4～5:5 の話者から, M 氏や T 氏のようにアノよりもソノを多用する話者が存在することが特徴的である。一方, HC の表 4 においては, 10 名の話者全てが, 圧倒的にアノを多用して話していることが見て取れる。SM 氏と KT 氏がアノとソノの使用の比率が 8:2 ほどである以外は, 全ての話者でアノが 9 割以上とい

う高い率で使用されているのである。

このことも、本節冒頭で述べたようにBCにおける方が、より慎重に語彙・表現形式を選択していると考えerことで説明がつくだろう。つまり、時事問題のような抽象性が（身の回りの話題に比して）高い話題を扱う際には、適切な語彙の選択や、洗練された表現を選び出す作業に時間と負担がかかり、ソノの使用が増すのではないかと考えられるのである。これは3.2節の結果と同様（12）の仮説が正しいことを示している。

ではなぜ、話者がより慎重に語彙・表現形式を選択すればソノが増えるのであろうか。このことについて次節以降で考察を進めていく。

4. アノ・ソノの違い

定延・田窪（1995:79）では、アノは（4）のようであるとされる。（4）を再掲する。

（4）アノ（一）の基本的用法

言語編集という、聞き手の存在を予定する心的操作を行っていることを表す。

この心的操作は具体的には名前の検索と、適切な表現の検討に二分される。前者は、モノ自体は分かっているが、モノの名前が思い出せないという場合の心的操作であり、後者は言いたいコト（漠然とにせよ定まっている）に適した言い方を編集するという操作である（p.79）⁴。いずれにしても、何らかの言いたいモノ／コトがあり、それに対応する言語形式を検索、編集するという作業であると理解できる。本稿でも、アノについては（4）を踏襲する。

一方ソノは、暫定的にできあがった発話形式の案とでもいうべきものに「校正」「再検討」を加えるような編集作業の際に用いられる標識であると考えることができる。例えば、言いたいコト／モノをまとめてPで表すとしよう。アノが発話される際の編集作業は、Pに対応する語彙・表現形式（まとめてLとする）を検索、検討してPに対応する発話を編集するものである。

（21）アノが用いられる際の編集作業

P(言いたいコト／モノ) → L(語彙・表現形式)	⇒	アノ
---------------------------	---	----

他方、ソノは（21）でできたLを基にして、Lと同じ内容を表す別の語彙・表現形式を検索・検討し、新たに別の発話形式L'を編集する作業中に現れると考えられる。この作業は言語形式から別の言語形式を作り出すという点で、純粋に言語内的な処理である。

（22）ソノが用いられる際の編集作業

L → L'(Lと同じ内容を表す別の語彙・表現形式)	⇒	ソノ
----------------------------	---	----

PからLを編集する際には、話者は普段最も頻繁に使用するような語彙・表現形式を用いて発話形式を作るであろう。特に語彙や表現形式に配慮しなくてもよいような状況では、Lを用いて十分に発話することが可能である。なお、誤解を与えないうちに断っておくと、LとL'が異なる形式である必要はない。後述するが、L'はLから複数作られることもあり、その一つがL=L'である可能性はある。たまたまそれが発話された場合には、LとL'が同じになるが、このこと

は本稿の主張をおびやかすものではない（次節（28）の議論を参照のこと）。

それでは、(22)のように、Lからさらに別の表現形式を編集しなければならないときとどのようなときであろうか。たとえば、より洗練された語彙や表現を用いなければならないような場合には、いったん作成したLを参照しながら、新たにより適切なL'を編集し直すという作業が必要になると考えられる。ソノが発話されるのは、そのような外的な要因により、Lを再検討しなければならないような場合であると考えられるのである。

ソノが発話される際にはLが作成されていなければならないと考える根拠として、アノのみで発話する話者は存在するが、ソノのみで発話する話者は存在しないということが挙げられる。本稿を執筆するにあたり、テレビ番組から20名以上、OPIのテープ、およびKYコーパスから40名以上、実際に調査を依頼して録音を行ったものが10名程度あるが、この中で、調査の間、ソノのみで発話を続け、アノが一度も出現しなかった話者は皆無であった。一方、アノのみで発話し、ソノが一切発話に現れない話者は複数存在する（例えば、表1中のIk氏、T氏、W氏は初・中級のインタビュー中にはソノを発していない、また表3中のAM氏も同様）。また、今回提示した多くの話者が、ソノに比してアノを多用する傾向にあり、データを見る限りでは、ソノが使用されるためには、アノの使用が前提になると考えられるわけである。このことは、いったんアノが使用されるような編集段階（Lを作成）が存在し、その後別の編集段階（L'を作成）が存在することの一つの傍証と言えるのではないだろうか。

以上の議論が正しいものであるとすると、(12)のように、話題が抽象的になったりして語彙・表現形式の選択が慎重に行われるようになると、なぜソノが現れるようになるのかが説明できる。抽象的な議論を行うような場合には、相手に誤解を招かないような発話を行ったり、専門的な用語を用いながら話したりするなど、より慎重に言語編集作業を行う必要があるために、LからL'を作る作業が行われ、結果としてソノが発話されるようになるのである。一方、身近な話題を話すような場合はその必要が相対的に少ないために、ソノの使用率は下がると考えられるのである。

また、大工原（2005）に対する反例としてあげた(11)に、なぜソノが現れるかということに対しても、本節の考え方は明確な答えを与えてくれる。(11)において話者は、切り出しにくい話題を話そうとしている。言いたいことはすでに決まっているが、それを適切な表現にのせて話さなければ自分が不利益を被ったり、あらぬ誤解を受けたりしてしまうような場面である。このような状況下では、話者がL'を作ろうとすることは容易に想像できる。

(11) a. 田中さん、実は…ソノ…折り入って相談したいことがあるんですけど…。

b. 美子さん、アノ…ソノ…僕はあなたが好きなんです！

以上のように、アノ・ソノは言語編集という心的操作を行っていることを表す標識であると考えられるが、その編集作業の内容が両者の間で異なっていると考えると、なぜ話題によってソノの使用率が変わるのかや、言語的文脈がゼロの状態である談話の開始部にもソノが現れるのかという問題について自然な説明を与えることができる。

5. ソノの発話効果

間投詞アノが、発話の効果を和らげるために用いられることは、定延・田窪（1995:85-88）で指摘されている。以下、定延・田窪を引用する。

(23) すでに述べたとおり、「あの（－）」は、言語編集という話し手の心的操作状態を表す。このことからすれば、話し手が「あの（－）」を用いることにより、発話形式に気を配っているという態度を表出し、結果として発話のぞんざいさ・さしでがましさを減殺できるということは、容易に理解できる。

(24) a. あの（－）、窓を開けてもらえますか？（依頼）

b. 先生。あの（－）、ズボンのチャックが開いていますよ。（相手の明らかなミスを指摘）

c. あの（－）、田中さんからお電話ですが。（相手の発話の遮り）

（以上、定延・田窪 1995:86 より引用、(24) はスタイルを改変）

ところで、ソノにも発話効果が存在することが堤（2004）で指摘されている。

(25) 課長：最近元気がないな。何か悩み事でもあるのか？

部下：課長、実は、（アノー／ソノー）、…会社を辞めたいと思っています。

(26) A：おい！こんなところで何をしてるんだ。君は今東京にいるはずじゃないか！

B：あ、課長！いや、アノ、??- *（ソノ）、実は今日実家の母が急病で…。

（以上、堤 2004:3 より引用）

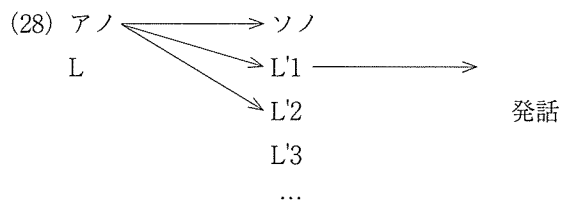
(27)（別の女性と手をつないで歩いているところを恋人に見つけられた）

A：太郎さん、この女の誰、誰？

B：あ、花子、いや、これは（？アノ／ソノ）…。

以上のような例をあげ、堤（2004）は、ソノには「言い訳的ニュアンス、言いにくいことを切り出す」効果があると指摘している。この指摘をうけ大工原（2005:74）が、(25) について行った調査によると、「126 人中 89 人が「あの（－）」と「その（－）」にニュアンスの違いを感じると答え」、その中の「35 名が「その（－）」に話し手がより言いにくそうにしているようなニュアンスを感じたと記述し」と報告している。このような言い訳めいたニュアンスや、言いにくさといった発話効果はどのようにして生じるのであろうか。

L から L' を編集するとき、L' として選択される語彙や表現形式は必ずしも一つであるとは限らない。時には複数のものを、最終的な発話形式の候補として準備することもあるであろう。このイメージを図示すると次のようになる。



言い出しにくいような内容を発話する場合には、適切な表現を用いて、相手を傷つけたり怒らせたりしないようにする必要がある。ソノを用いることで、そのような配慮を、話者がしている

ことを聞き手に伝えることができると考えられる。また、ソノを用いることで、素直に伝えるべき内容Pを、表現形式を複数用意することで、曖昧にしたりうまくごまかしたりしようとするような意図が伝わってしまう。その結果として、堤（2004）が言うような、言い訳めいたニュアンスが感じられるようになるのだと考えられるのである。

ソノが持つ、このような発話効果は、多くの文学作品の中で使用されている。言語感覚に優れた作家が、あえて意図的に文字化をしてまでソノを用いさせる時には、登場人物が言いにくいことを発話するということが、読者に容易に伝わるという効果がある。

(29) 「眼を見せて」

「ああ」

眼をのぞきこんで博信は訊いた。

「そのお…」

「なんだ」

「隆ちゃん、…その時…黒目の縁に白く濁ったようなのが現れたって言ったね」

（『解夏』 p.28）

(30) 「…警察からの電話じゃ、そこまで詳しいことは判りませんでしたから、ニュースを聞いてやっと事件の内容を知ったんです。四人もの人が死んでるって。それであの子—孝弘はね、お父さんがあわてて逃げようとしてるのは、その…人殺しの方にも関わりがあるからじゃないかって思ったらしいのね。…（以下省略）」

（『理由』 p.245）

(31) 「わたしは図書館が好きなの。そりゃあ、本だって嫌いじゃないけれどね」

そう言って、彼女がちらっとウィルをみたので、ほくはいそいで言った。

「あ、これはウィル。僕の、そのお…」

「友だちです」

と、ウィルが言った。友だちというには年がはなれすぎているかな、と思って口ごもってしまったんだけど、ウィルもパーネルさんも、そんなことぜんぜん気にしていないみたいだった。

「ハイ、ウィル」

片手をさしだして、パーネルさんが言った。

「えーと、こちらはパーネルさん。僕の、そのお…」

僕はまた口ごもった。食堂のおばさんです、じゃ失礼な気がしたのだ。

「友だちよ」

パーネルさんが言う。

（『こうばしい日々』 pp.46-47）

(29) は、主人公が重い眼の病気にかかり、幼なじみで眼科医の博信に診断を依頼し、その結果を聞きに来る場面である。幼なじみであるということが、主人公に対して病名を告げることを困難にし、博信は「そのお…」と口ごもるのである。(30) についても同様で、父が「人殺し」に関わり合いがあるということをつめらいながら語っている。(31) は、主人公は小学生の男の子である。男の子の友達、大学生のウィルと一緒にいる時に、パーネルさんというおばさんと

ばったり出会うというシーンである。パーネルさんも少年の友達であり、少年は自分と、2人との関係をお互いに紹介するときにもどのように言えばいいか考えあぐねている。そのことを作者は「口ごもる」という表現を用いて、明確に読者に語っているが、二度現れるソノは、少年がどのような表現を用いて紹介するか、その表現のいくつかから一つを選んでいる途中であるということをも効果的に伝えているのである。特に二度目のソノの後、表現候補として「食堂のおばさんです」があげられ、それでは「失礼な気がした」ので口ごもっていると書かれていることにも注意されたい。

6. おわりに―指示詞理論との関連

以上、本稿では間投詞アノ・ソノが発せられる時に、話者の中で行われている心的操作がどのようなものであるかについて論じてきた。まず、誤解を避けたり、洗練された語彙や表現形式を選択しなければならぬなど、慎重な言語編集処理が求められる状況では、ソノの使用率が上昇するとの仮説を立てた。この仮説を検証するために、抽象的な話題を扱うような場合にソノの使用率が上昇することを報告した。抽象的な話題を扱う場合には、話者の意図を聞き手により正確に伝えたり、より専門的な語彙・表現形式を用いたりしようとするために慎重な編集作業を行っていると考えられるが、仮説が予測するとおり、抽象的な話題では、そうでない場合に比べてソノの使用率が上昇することが示された。

次に、なぜ話者がより慎重な編集作業を行えばソノが増えるのかという問題を設定し、アノとソノの違いについて考察した。アノは定延・田窪（1995）の指摘通り、言いたいコト／モノの検索・検討という編集処理を行っていることを表す心的操作標識であり、ソノはアノが発せられる段階で行われた編集処理によって作成された発話形式案（L）から、別の表現形式（L'）に編集中心であることを表す標識であると考えた。このように考えることで、言語的文脈がないような談話の開始部においてソノが使用できることについても説明が可能になることを論じた。また、ソノの発話効果について、なぜ言い訳めいたニュアンスや言いにくそうなニュアンスが生じるのかという問題についても言及した。

最後に、本稿での主張を指示詞の理論の中で捉えることの可能性について少し述べておきたい。間投詞のアノ・ソノは指示詞アノ・ソノから派生したものであり、そうであるならば、指示詞の理論上で間投詞の説明を試みることは決して無駄なことではないと考えられるからである。

第2節において大工原（2005）の研究について批判的に検討したが、そこでは言語的文脈の有無によってソノの自然さが変わるという彼の説では、話題の違いによってソノの使用率が変わることや、全く言語的文脈がないような状況でソノが使用できることが説明できないことを見た。一方、大工原は全体的な方向としては指示詞の理論から間投詞を見る努力をしており、この点は筆者と軌を一にする。

金水・田窪（1990, 1992）、田窪・金水（1996）、金水（1999）およびそれらに影響を受けた最近の指示詞研究においては、指示詞はD-領域／I-領域に登録されている要素のどちらを用いて発話を行うかを指定するものである。一方、間投詞は本稿でも度々述べているように、話者の

中での情報処理状態を表す標識である。両者にはその定義上、本質的な違いがあると思われるが、大工原（2005:75）では、

(32)「間投詞「あの（－）」と「その（－）」は、話し手がこれから発話しようとしている意味情報がどの心的領域に属するかによって使い分けられる。」

とされ、指示詞と異なる定義であるかのようである。また、大工原（2005:75）が結論としてまとめている（33）も、指示詞と間投詞の本質的な違いを区別できないと思われるが、（34）のように書き換えればよいのではないかと思われる。

(33)「間投詞「あの（－）」と「その（－）」は、話し手がこれから発話しようとしている意味情報がどの心的領域に属するかによって使い分けられる。」

(34) 間投詞「あの（－）」と「その（－）」は、話し手がこれから発話しようとしている形式を、どの心的領域の情報を用いて編集するかということを表す心的操作標識である。

(34) で想定されている心的領域とは、田窪・金水（1996）他の D- 領域 / I- 領域であると考えよう。D- 領域には長期記憶内のすでに検証されたエピソードなどの情報とリンクされた要素が格納され、I- 領域には言語的に設定された情報が格納されている（田窪・金水 1996:66）。本稿では、アノが用いられる編集作業は、言いたいモノ / コトである P を参照しながら L を作成する作業であるとしたが、P が D- 領域内の情報であるとするれば D- 領域の情報を使用中にアノが発せられると考えることができ、指示詞アノとの連続性が見えてくる。このことは定延・田窪（1995:83）でも触れられている。いったん L が作成され、そこから別の表現形式を作成しようとする、L が言語的な形式である以上、その形式から得られた概念的な情報のみを用いて L' を作成することになる。概念的な情報は I- 領域に登録されていることを考えれば、そこに登録された L から L' を編集する作業中にソノが発せられると考えられるのである。

ただ、この点については、なぜ心的領域内の要素を指す役割を果たす指示詞が、そこに登録されたものを用いて言語編集を行うことを示す標識として用いられるのかということに対する答えにはなっておらず、単にそれぞれの指示詞が指す領域との関連性を示唆したに過ぎないなど、問題が残る。さらなる理論の精密化については今後の課題としたい。

注

- 1 I- 領域に対する概念としては D- 領域がある。D- 領域は「その要素の属性が、記憶の要素と現場から必要に応じてアクセスできる」、「長期記憶内の、すでに検証され、同化された直接経験情報、過去のエピソード情報と対話の現場の情報とリンクされた要素が格納される」。(田窪・金水 1996:65-66)
- 2 大工原（2005:72-73）では「事前の」言語的文脈を問題にしているようにも読める。つまり、その談話のセッション以前に何らかの言語的文脈があったかどうかということが問題になるというのである。しかし、指示詞のソノについては庵（1995）で、先行詞が直前になければ使いにくいことが報告されており、この特徴がなぜ間投詞では観察されないのかが説明されなければならないであろう。また、過去の談話について言及する場合には、「*ソノ話」ではなく「アノ話」であり、仮に大工原のいう言語的文脈が「事前の」ものであったとしても、指示詞の用

法から間投詞のそれを説明することには無理が生じるとされる。

- 3 今回の調査に協力してくれたテスターは4名であった。今回は、(17c)のように、比較の妥当性を保証するために初・中級と上・超級の各テープを提供していただく必要があり、この4名が協力を快諾してくれた。記して感謝する。
- 4 より正確には名前の検索は、話し手の意識を心的バッファからそのモノに関する情報が格納されている心的データベース内の該当箇所に戻し、そこで属性の1つである名前を検索するという操作であり、表現の検討は心的バッファで行われる作業である(定延・田窪1995:79)。心的バッファ、心的データベースに関しては田窪・金水1997も参照)。

参考文献

- 庵功雄(1995)「テキストの意味の付与について－文脈指示における「この」と「その」の使い分けを中心に－」『日本学報』14, 79-93, 大阪大学文学部日本学研究室
- 金水敏(1999)「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』6-4, 67-91, 言語処理学会
- 金水敏・田窪行則(1990)「談話管理理論からみた日本語の指示詞」『認知科学の発展』3, 日本認知科学会(金水・田窪(編)1992に再録, 123-149)
- 金水敏・田窪行則(1992)「日本語指示詞研究史から／へ」(金水・田窪(編)1992に所収, 151-192)
- 金水敏・田窪行則編(1992)『指示詞』ひつじ書房
- 定延利之(2005)『ささやく恋人, りきむレポーター－口の中の文化』岩波書店
- 定延利之・田窪行則(1995)「談話における心的操作モニター機構－心的操作標識「ええと」と「あの(ー)」－」『言語研究』108, 74-93, 日本言語学会
- 大工原勇人(2005)「間投詞「あの(ー)」・「その(ー)」の使い分けと指示詞の機能との連続性」『日本語学会2005年度秋季大会予稿集』69-76, 日本語学会
- 田窪行則(2005)「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』34(11), 14-21, 大修館書店
- 田窪行則・金水敏(1996)「複数の心的領域による談話管理」『認知科学』3(3), 59-73, 日本認知科学会
- 田窪行則・金水敏(1997)「応答詞・感動詞の談話的機能」音声文法研究会(編)『文法と音声』257-279, くろしお出版
- 堤良一(2004)「アノー・ソノー－談話管理の視点からみた日本語のフィラー－」第295回岡山国語談話会における口頭発表(岡山大学), 1-11
- 堤良一(2006)「談話中に現れる間投詞, アノ(ー)・ソノ(ー)について」『日本言語学会第132回大会予稿集』87-92, 日本言語学会
- 牧野成一・鎌田修・山内博之・齋藤真理子・荻原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子(2001)『ACTFL OPI入門』アルク
- 山根智恵(2002)『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版

用例出典（小説など）

江國香織（1995）『こうばしい日々』新潮社
さだまさし（2003）『解夏』幻冬舎
宮部みゆき（2004）『理由』新潮社

用例出典（音声データ）

K 氏（大学教員）：2006.1.28, 岡山市にて協力いただいたもの
M 氏, T 氏（大学教員）：2006.1.13, 岡山市にて協力いただいたもの
OPI テープ：Ik 氏, In 氏, T 氏（上記 T 氏と同一人物）, W 氏にそれぞれ提供いただいたもの。
TBS 系列「ブロードキャスター」2006.2.4, 2.11, 2.18, 3.4, 3.11, 4.15, 4.22, 4.29 放送分
TBS 系列「はなまるマーケット」2006.3.22-3.24, 3.27-3.30 放送分

用例出典（コーパス）

K Y コーパス version1.2 (2004) (KY コーパスの公開元は、実践女子大学の山内博之研究室 (yamauchi-hiroyuki@jissen.ac.jp) である。)

謝 辞

本稿は日本言語学会 132 回大会（於東京大学，平成 18 年 6 月 18 日）における口頭発表「談話中に現れる間投詞，アノ（一）・ソノ（一）について」を大幅に加筆修正したものである。当日会場で有益なコメントをいただいた方，さらに，指示詞研究会，土曜ことばの会，岡山国語談話会の会員の方々および岡山大学大学院社会文化科学研究科および文学部の学生諸君に貴重なコメントをいただいた。特に三原健一先生，金水敏先生，岡崎友子先生，辻星児先生，宮崎和人先生，福島泰正氏，皆木信助氏，小山明子氏，陳新妍氏，馬小菲氏，そして本稿を丁寧に査読していただいた二名の査読者の方に記して感謝申し上げます。

付 記

本研究は文部科学省の科学研究費補助金による基盤研究 (C)「古代・現代語の指示詞における総合的研究」(課題番号：19520406, 研究代表者：岡崎友子氏) の成果の一部である。

(投稿受理日：2007 年 6 月 5 日)

(最終原稿受理日：2007 年 12 月 11 日)

堤 良一（つつみ りょういち）

岡山大学大学院社会文化科学研究科
〒700-8530 岡山市津島中 3-1-1
tsunko@cc.okayama-u.ac.jp

The difference between the interjections *anô* and *sonô* which appear in discourse

TSUTSUMI Ryoichi

Okayama University

Keywords

interjections, discourse operation markers, *anô/sonô*, OPI

Abstract

This paper explores the difference between *anô* and *sonô* used as interjections in Japanese with a special reference to discourse management theory. Both forms are considered discourse operation markers which show the hearer the interactions the speaker is dealing with in his/her mind. *Anô* indicates that the speaker is editing an expression (L) out of what he/she wants to convey (P) while *sonô* shows that he/she is constructing other expressions (L') out of L. I demonstrate that the latter is true by showing that *sonô* is used more frequently when topics become more abstract. I find that when dealing with abstract topics, the speaker uses a procedure, that is, the increased use of *sonô*, which allows him/her to avoid misunderstandings or to use more sophisticated words. This explains some of the other effects *sonô* has when uttered in a discourse. In addition, I suggest the possibility of dealing with two interjections in the theory of demonstratives (Takubo and Kinsui 1996), taking into consideration the fact that the interjections *anô* and *sonô* derive from the demonstratives. That is, *anô* shows that the operation takes place in the D-domain while *sonô* takes place in the I-domain.